

デジタルハリウッド大学の研究紀要『DHU JOURNAL』Vol.08 2021をお届けする。この研究紀要は、デジタルコンテンツ領域を中心とした様々な学術的課題に対して、理論と実務を架橋する高度な研究活動の発表の場として発刊され、8年目となる。

編集幹事も3回目となり馴れてきた。この世界は激変しているようにみえるが、研究紀要の編集の立場からすると、昨年度から変化の少ない一年間だったかもしれない。学習理論に高原期という言葉があるが、成長が停滞しているようにみえるときほど、それぞれが内省的な発露に従い、個別の者としてがんばってくれているのだと思っている。査読により結構な本数を不掲載にしているのに、毎年ページ数が徐々に増えていっているのが、何よりも客観的な証拠と言えるかもしれない。

ところで、この4月から、大学院の専攻長となった。まだ模索している状況ではあるが、開学からそれなりの時間が経ち、新参ではない立ち位置となってきた本学の使命をあらためて実感し、研究紀要という取り組みの重要性を再確認しているところである。

この研究紀要が発刊されるタイミングで、研究論文発表会というイベントを開催するようになった。前はオンラインのみでの実施となったが、初めて研究発表をする者も多くいて、有意義なものになったと思う。なによりも、質疑応答が楽しいというのは、確からしい手応えである。今後も、理論と実務の架橋の発火点となるような活動として、この研究論文発表会を育てていきたい。

大学院の授業では「アカデミックライティング」という科目を担当して、院生に論文の書き方を教えるようになった。これまでに論文らしい論文を書いたことのないひとたちに、研究とはどういうものか、論文を書くというのは実はどういうことなのかを説明するのは、とても難しく、新しい発見もあり、刺激的である。書くという作業の方法よりも、自身の成果をどのように積み重ねていくか、長く続けて向上していくにはどうすべきか、といった哲学的な問題がいちばん大切なのだと感じている。これまでの私自身の人生を振り返り、旅物語風に講義をしていると、つくづく歳をとったなとも思う。

今回も、予め編集方針として、これまでの研究教育活動の成果をまとめた「これまでのまとめ」と、他では受け入れられにくいような先端的で萌芽的なテーマを論考した「未来への挑戦」とを、主なふたつのテーマとして掲げ、投稿を募った。教員と職員、大学院を修了した研究員、現役の大学院生らから、まさに多様な研究成果を集めることができた。外部の方々に査読のご協力をいただき、メタ査読の仕組みにより、必要に応じて再査読も行って質の向上に努めた。特に、株式会社立である本学の特色のひとつである教員と職員の協働に関わる研究成果については、引き続き充実したものとなった。

繰り返しになるが、これをご覧の方々には、本学関係者として、あるいは共同研究者や協力支援者として、次号への投稿を検討していただきたい。

いまから世界を幸せにするひとをここで待っている。

編集幹事 Chief Editor

木原 民雄 KIHARA Tamio

デジタルハリウッド大学 教授 大学院 専攻長
Digital Hollywood University, Professor, Chairperson of the Graduate School